キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つひまぶ 天神祭号

つながるひとまちぶんか

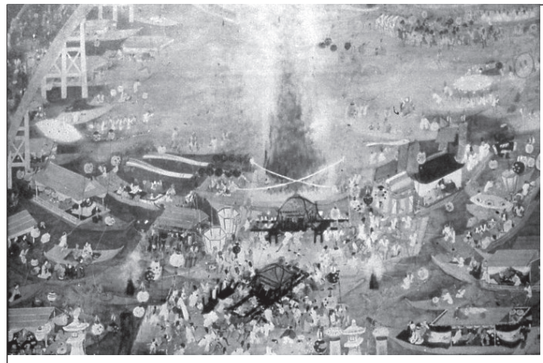
6月号 2015

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.5　2015年6月5日発行（毎年3･7･11月発行予定）　編集・発行：つひまぶ実行委員会／大阪市北区役所＋北区のおもろ通信団（浅香保ルイス龍太・棚橋真理・藤堂千代子・山田寿也・山本宜弘・依藤智子）＋大阪市職員ボランティア　連絡先：大阪市北区役所（大阪市北区扇町 2-1-27）【tel】06-6313-9743 【fax】06-6362-3821 【mail】tsuhimabu@gmail.com 【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　定価：0 円　主な配布場所：大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

天神祭準備 茅の輪づくり

〝美〟は絵筆から――誰がいちばん天神祭を描いたか？

大阪大学総合学術博物館長　橋爪節也


《浪花天神祭》大正15年（1926年）、第7回帝展特選「天神祭―火と水の都市祭礼」より

豪華絢爛、水都の夏を彩る一大ページェント。祇園祭が屏風祭と言われ、山鉾が動く美術館にたとえられるように、天神祭にも華やかな美意識がちりばめられている。

催太鼓で撥をふるう願人の衣装や所作、コンコンヂキヂン～チキチキギンギン、地車のリズムと龍の踊りには、大阪らしい活気が凝縮されているし、商店街のアーケード入口に設置された「御迎え人形」や、境内に再現された蜆の貝殻による藤棚の「つくりもん」など、なんやこれはと現代人の審美観を動揺させるほど、江戸時代の都会的エスプリに富んだ文化も味わえて魅力的だ。

では、この天神祭を愛して一番たくさん描いた画家が誰か、ご存じでしょうか？

おそらく生田花朝（いくた かちょう／1889年～1978年）でしょう。花朝は、明治22年（1889年）、現在の大阪市天王寺区上之宮町に生まれ、本名は稔子、女性の日本画家である。

今年は、大正14年（1925年）に大阪市が第二次市域拡張で〝大大阪〟となって90年の記念の年だが、花朝は〝大大阪〟成立と同じ年の第6回帝国美術院展覧会（帝展）で初入選を果たす。日展の源流ですな。そのご褒美に、三方ガラス張りの八畳の画室を父親からプレゼントされ、そこで描いた《浪花天神祭》が、翌年の第7回帝展で、なんと女性画家初の特選となった。

絵は現在、所在不明だが、人物三百人、船六十艘あまりを描きこんだと本人が語る情景はダイナミックで、図版で見るかぎり、天神祭最大のハイライト船渡御の夜、神輿が筏に乗り込む瞬間を描く。篝火は燃えさかり、御鳳輦、鳳神輿、玉神輿、金幣などの筏を中心に無数の船がひしめき、難波橋は見物人でごった返す。

押すな押すなの祭の熱気に溢れる躍動感ある絵を「女の人が描いたんでっか」と口から漏らしたら失礼というもの。現代の天神祭でも、ギャルみこしや獅子舞など女性の盛り上がりがすばらしいでしょう。当時の大阪は、歌人吉井勇が「女絵師女うたびとなど多く浪華は春も早く来るらし」と詠んだように、女性の画家たちが大活躍した街でありました。

さらに「花朝」という号が噺家さん風に見えたら、「天神祭なら天満繁昌亭と関係があるのでは」と思ったそこのあなた―。半分ハズレで半分アタリです。

花朝はむろん〝米朝一門〟ではなく、画家であったのがハズレだが、アタリは、繁昌亭の緞帳にデザインされた天神祭の原画が、花朝の作品であること。

大阪の「郷土芸術」を礼讃した花朝は、四天王寺や住吉大社などを題材にしたほか、帝展特選をきっかけに生涯にわたって天神祭を描きつづけた。中之島の大阪国際会議場・グランキューブの緞帳も、天神祭を描いた花朝作品が原画である。

祭の躍動感と美を絵画に凝縮し、今もなお、芸術的余香を大阪の街にただよわせる生田花朝。会議場で世界の来賓にアピールする絵を描いたのが誰か、「大阪人なら当然知ってはりますな」といっぺん言ってみたくなる、そんな天神祭ゆかりのアーチストです。

《浪花天神祭》「天神祭―火と水の都市祭礼」より

【橋爪節也】美術史家。1958年、大阪市生まれ。大阪大学総合学術博物館長。近世～近代大阪の美術を専門とする。近代大阪の都市文化に関する膨大なコレクションをお持ちで、いつか、拝見したいところ。大阪市に近代美術館を建設する仕事に奔走すること20年余。その重厚な仕事とは裏腹に、軽妙な話術と独特の視点で大阪を語る。ファン多数。

編集後記

7月25日の夜、還御祭が終わり、神輿が当屋に納まって、講元から「今年もええ祭やった、お疲れさん！」の声とともに天神祭は終わります。翌日、片付けのなかで出る関係者からの言葉は、「さあ、来年の祭がはじまる…」。みんながこんな気持ちなのかと思うと同時に、なにがこういう思いにさせるのか。私たちが天神祭を楽しんでいる裏側で、7月24日・25日の2日間をつつがなく遂行させるために、いつからどれだけたくさんの人々が動いているんだろうか。この「天神祭号」は、そんな疑問からはじまりました。天神祭は、まだ桜も咲かない肌寒い時期に、動き出します。祭の当日までまだまだ日にちがある夏の日に境内で汗を流して作業する人々は、じつは、当日、雅な衣装に着飾った人々だったのです。まるで陰と陽。ただ祭が好きだけでは言い表せない、千余年脈々と続いている歴史の深さを感じました。今号を読んで、天神祭をより身近に感じて、花火や船渡御だけじゃないあなたの天神祭を発見していただけたらうれしいです。（藤堂千代子）

「つひまぶ」ブログ　毎週月・木更新　http://tsuhimabu.blogspot.jp

「つひまぶ」では編集メンバーを随時募集しています。興味がある方はFacebookにてご連絡いただくか、大阪市北区役所地域課区民協働担当（tel. 06-6313-9743）までご連絡ください。

天神祭の七十五日間

構成／藤堂千代子・浅香保ルイス龍太

天神祭というと、みなさんはなにを思い浮かべるだろう。夏の夜空に打ち上げられる奉納花火？　壮麗な陸渡御？　確かに陸渡御や船渡御は天神祭の華だが、もちろんそれだけが天神祭ではない。一説にはひと晩に１３０万人ものにぎわいを見せると言われる7月24日の宵宮、25日の本宮だけでなく、そこに至るまでも、さまざまな神事や神賑行事がおこなわれ、陰に日向に膨大な人が関わっている。そんな天神祭の全貌をお伝えするのは、どれだけページを重ねても不可能。そこで、つひまぶでは、表のみならず、その裏側も含めて、天神祭ではなにがおこなわれているのかを、時系列で追ってみた。無論、お伝えできるのは、そのほんの一端でしかないのだけれども。

神職は天神祭でなにをしているのか。

大阪天満宮 禰宜　岸本政夫

5月11日、天神祭に関する最初の会議である「天神祭実行委員会」が開催され、大阪の夏を彩る一大ページェント・天神祭は、本年も賑々しく斎行されることが決定しました。大阪天満宮の職員にとっては、天神祭が無事に終了するまで、気の抜けない日々が続きます。

もっとも、準備は、それ以前からはじまっています。

3月、奉納花火の打ち上げ数などの問い合わせが、早くも、マスコミから飛んできます。

また、船渡御に参加する企業などの奉拝船の主催者には、本年の参加意志の確認をおこないます。

4月になると、警察、消防、府市の関係する部署に、概要の相談にまいります。また、自主警備の打ち合わせをおこない、全体の行事案を作成します。

5月には、それを持って実行委員会。続いて、渡御の実行部隊である講社の会議。

6月に入ると、境内設備がつくられ、にわかに境内の様子が変わってきます。天神祭の主催者である渡御行事保存協賛会の総会が開催され、この後、地区ごとに担当者が募金依頼にまいります。下旬には、警察、消防、官公庁等への許認可申請も。

7月、各種の最終会議を経て、あとは、すべて遺漏なきよう、確認に確認を重ね、天神祭を迎えます。

7月23日、3泊4日の参籠に必要な荷物を詰め込んだカバンを抱え、職員が出勤してきます。

この日は、御羽車が天神橋筋商店街を巡行します。駐輦祭に奉仕する神職は御羽車に同行し、天六までいち往復。その後、ギャルみこしの宮入があり、夕刻からは、ＯＢＰにて前夜祭。これにも神事をおこなう神職や巫女が付き添います。

前夜祭が終わると、船渡御を担当する神職は船に乗り込み、船渡御コースを巡航しながら、照明や船着場の確認にまわります。

明けて7月24日、夜明け前の午前4時、催太鼓と地車囃子の一番太鼓で天神祭の幕が上がります。

午前中は、宵宮祭、鉾流神事、西区の千代崎行宮での宵宮祭と神事が続き、氏地からは、神輿や子ども太鼓などが宮入りします。

午後からは、どんどこ船が川から陸に上がり、宮入。催太鼓が境内を出て巡行、天神祭囃子の踊りが宮入…。平行して、船渡御担当者は、近畿運輸局による船渡御船の完成検査に立ち会います。夕刻には神社に戻り、巡行から帰ってくる催太鼓と獅子舞を迎え、宵宮の行事は終了。一部担当者は、周辺のお掃除ボランティアであるダストバスターズに合流し、ゴミの回収を手伝います。

迎える本宮の7月25日、早朝から職員はさまざまな場所に散っていきます。祭典の準備はもちろんのこと、陸渡御の給水場の設置、催太鼓や神輿、御鳳輦を奉安する船の設備、花火の保安区域を示すブイの設置、舞台船などの船の固定位置の指示、前日に残した渡御船の完成検査などなど…。毎年、疲れ切ったままで本番を迎える始末です。

さて、天神様の御分祀を御鳳輦にお遷しして渡御の準備が整うと、先頭の催太鼓が発進し、陸渡御がはじまります。大半の神職は、奉行として陸渡御に同行。一部は、催太鼓の発進を見届けると、そのまま船渡御の現場に向かい、救護関係の医師・看護師の受け入れ準備、花火打ち上げ現場や救護艇との無線チェックをしながら、先頭の催太鼓の到着を待ちます。

船渡御がはじまるまでには、監視船に乗る神職は、全員が水上に出ています。船渡御の状況は、無線で逐一本部に報告。救護要請や花火現場の状況、警察からの連絡なども、本部に集約。船渡御のあいだ、神職は、まるで戦場にいるようです。

先頭の催太鼓が戻り、還御がはじまり、最終の玉神輿が宮入りして天神祭は終わります。

と言いたいところですが、そうはまいりません。ダストバスターズの有志が深夜2時頃まで神社周辺のゴミを回収してくれています。担当神職も、疲れた足を引きずりながらゴミを回収し終わるまで、天神祭は終わりません。

天神祭を終えた翌日の7月26日、境内の片付けだけではなく、大川沿い公園のゴミ集めが待っています。夏場のことで腐敗も早く、公園を利用する方々からの苦情が絶えません。

さらに、この日は、鳳神輿と玉神輿の庫入れ作業も。各講の方々と一緒に神職も神輿を担いで、庫に納めます。大変な作業ではありますが、これが済んで、やっと、参籠していた職員に解散の指示が出ます。

ほとんどの職員が達成感を覚える瞬間です。

毎年のこととはいえ、天神祭は、年々変化するまちの様子に合わせて、柔軟に対応していかなければなりません。本年も盛大に、そして事故なく安全に天神祭が斎行できるよう、願ってやみません。

天神祭、5月11日から7月26日まで

今年も天神祭を斎行するかどうかが決められる。

5月上旬

天神祭は地域の崇敬者・講社連合の協力なくしては斎行できない。毎年5月上旬、天神祭講社連合・天神祭実行委員会が集まって総会が開かれる。そこで、天神祭斎主・寺井宮司より、天神祭斎行の協力依頼がある。天神祭は、この日からはじまる。今年は5月11日。前年にならって、自動的にはじまるわけではないのだ。

神童インタビュー

2014年神童　林 欣次郎君（当時12歳）とご両親

衣装を着るとスイッチが入りました

天神祭の神事に関わる人のなかでも、最も重要な存在といえる神童。7月 24 日におこなわれる鉾流神事では、白木の神鉾を流し、水害、疫病の悪霊退散を祈願する重要な役割を担っています。その神童は、西天満地区に住んでいる小学校5、6年生のなかから選ばれますが、祭ではどんなことをしているのか？　昨年、神童をされた林さんにお話をうかがいました。

―― 神童を務められた感想を教えてください。

林「緊張しましたよ。特に7月 24 日の鉾流神事は、失敗でもしたら怒られそうな雰囲気やったし。陸渡御では、同級生や先生に見られて、恥ずかしかったです。あと、暑かった（笑）」

―― 暑さといえば、外から見てもすごい衣装ですが、着てみてどうでしたか？

林「衣装を着ると気持ちが入りました。スイッチが入る感じです。動きにくくはなかったです。渡御のあいだも神職の人が近くにいて、気をつかってくれます。汗もたくさんかくけど、水分もたくさん摂ります」

―― お祭に向けての準備は大変だった？

林「お祭の1ヶ月くらい前に天満宮の神官さんが来て、家のお祓いをします。その後、祭壇がつくられます。毎日、朝と夕方に、お米、お水、お塩とお酒を供えます。自分とお母さんと2人でやりました。最初は面倒やったけど、だんだん天神祭への意識ができてきて、お祭が終わって、祭壇がなくなったら、ぽっかり穴が空いたような気持ちになりました。その間、ニンニクやお肉が食べれないので、大好きなイタリアンが食べれないのがつらかったです（笑）」

―― 精進潔斎のことですね。料理をされるお母さまはいろいろ気をつかって大変だったのでは？

林（両親）「そうですね、昨年は特にホームステイの子もいたので大変でした。直前の3日間は、ニンニク以外にも、香りの強いものがダメで、ニラやネギもダメでした。もちろん四つ足の動物の肉は食べれないので、牛肉も豚肉も食べれません。風邪をひかせないように、体調管理に気をつかいました」

―― 渡御ではご両親も一緒に歩かれますね。

林（両親）「父親はだいたい貸衣装なんです。母親の衣装はいろいろと決まりごとがあって、地域の方に相談して準備しました。夏の着物用のバッグや草履を探すのが大変でした」

―― 神童のお仕事は、天神祭が終わると、おしまいですか？

林「天神祭が一番大きな行事ですが、神童として、秋思祭にも参加します。秋思祭は 10 月にあります。それで終わりです。そこでようやく、大役、ご免です」（毬）

装束賜式

天神祭で大切な役目を果たす人々（渡御の道先案内人の猿田彦、瑞枝の童子の神童、御鳳輦の御霊を護衛する随身、神の御使いの牛を先導する牛曳き童子・牛曳き童女）を任命する儀礼。彼らは、6月下旬、天満宮宮司よりそれぞれ任命され、以後、潔斎して身体を清め、衣服をあらため、飲食を慎み、言語・動作を正しく、穢れや不浄に触れてはならない、「散斎」の厳しい生活を送る。また、神童とその家族は、7月 22 日から祭の終わりまでは、さらに厳しい「致斎」の日々を過ごす。

自由気ままな現代の子どもや若者が、この日から祭が終わるまで古式にのっとって過ごす日々は、平安装束を身につけることを含め、ハレ（非日常）の日々である。（ミ）

天神祭トリビア　神祇にお供えする飲食物を「神饌」という。神饌を供え祀ることは祝詞奏上とともに祭儀の中心である。明治８年（1875 年）に神饌はすべて生饌と定められたが、大阪天満宮では特殊神饌が供される。流鏑馬神事の甘酒はその一例。神饌のお下がりを撤饌といい、これをいただく会食を直会という。

神輿庫出し

船大工がつくった２トンもある神輿は、多くの人手がなくては庫から出せない。講員さん曰く、「少人数で重い神輿を出す作業はテンションが上がる」。鳳講・玉神輿講の講員さんが協力し、「よーい、よーい、よい」と神輿を担ぐときと同様の掛け声で運び出す。祭でも一緒に行動するので息もぴったり！これが祭の連帯感！（ミ）

太鼓中 台搦み

15 センチ四方の角材を麻縄だけで組み立て、催太鼓を据える台を組み上げる作業。その上に願人が座る「枕」を据え、棒鼻（前部）には「奉懸御宝前」、尻（後部）に「奉納御宝前」と墨書きした晒を巻く。７月中旬の暑い盛りのなか、汗だくになりながら、朝８時から夕方の４時くらいまで作業は続くが、天神祭を迎える重要な作業なので、もちろんおそろかにはできない。（ミ）

星愛七夕まつり

星辰信仰が色濃かった古代、天神祭は７月７日に斎行されていた。長く途絶えていたが、平成７年（1995 年）７月７日、約 400 年ぶりに「天満天神七夕祭」として復興。以来、天神祭のはじまりを七夕と位置づけ、「星愛七夕まつり」として、大川に LED 電球を流し、天の川に見立てて、にぎわい演出につなげている。境内には、夜店や天神橋筋商店街が主催するイベント、地域による模擬店なども。「星愛七夕まつり」でデビューするのが、紅白の梅の花をあしらった冠に浴衣姿で「そうらえ　聞きそうらえ　われら天神花娘」の口上で登場する天満天神花娘。
そうそう、天満宮の７つの茅の輪くぐりの７つ目の茅の輪「恋愛成就」は、天満宮の裏にある星合の池にあり、ここで見合いをした男女は結ばれるとの言い伝えから、カップルにとってのパワースポットとなっている。（ミ）

随身インタビュー　2014 年 随身　岡部 亘成君（当時 15 歳）とご両親／宮野 貴大君（当時 16 歳）とご両親

殿様になったような気分でした

陸渡御の花形といえば随身。御鳳輦の前を行く、黒（左大臣）の衣装と緋（矢大臣）の衣装をまとった２人のその姿は堂々としていて、思わず目を奪われます。もともとは天満宮の南側に住む 20 歳前後の青年の役目でしたが、近年では中高生がその役を担います。
昨年の天神祭で随身を務められた岡部さんと宮野さんに、随身から見た天神祭についてうかがいました。

―― まずは、随身を務められた感想を聞かせてください。随身の役割はやはり陸渡御がメインになると思うのですが、いかがでしたか？
岡部「思っていた以上によかったです！みんなは立っているのに僕だけ椅子が用意されたり、体調を気づかってもらったりして、殿様になったような気分でした」
宮野「あの、名前入りの大きなうちわであおいでもらったり、日除けの傘があったりしました。なにより、人に見られる気持ちよさがありました。優越感っていうんですかね。沿道の外国人と握手したり、小さい女の子を抱いて写真を撮ったりしました。スターになったみたいでした（笑）」
―― ご本人はそうおっしゃっていますが、ご両親はいかがですか？
岡部（両親）「うちは、息子のおかげで初めて天神祭を見ることができたんです。家がすし屋なので、祭の日はとにかく忙しくって。渡御のあいだは道を横切れないから、出前も遠まわりしたりしてね。天神祭は、７月 25 日の夜の宮入を見るだけなんです。それが去年は、息子についていって、祭をゆっくり見れました。船にも乗せてもらって、花火も間近で見れて、息子さまさまです」
宮野（両親）「息子がいつもと違って見えましたね。この子の兄も随身をさせてもらったんです。ほかにも年頃の人はたくさんいるのに２人ともさせてもらって、名誉に思っています。名前入りのうちわも、２人分置いているんですよ」
宮野「そういえば、小学生の頃から随身やるって洗脳されていた気がする（笑）」
―― 大変だったことは？
岡部「そうですね、体調管理でしょうか。特に大変だったことはないですね。冷えピタを貼ってもらったりして、衣装はつらくはなかったですけど、帽子がずれるのが気になりました」
宮野「帽子がずれそうで、首のくくりがきつくて痛かったですね。見られているので、あくびもできないですよ。あとは、体力勝負なのに肉が食べれないのはつらいですね。船でお弁当が出たんですが、やっぱり野菜が中心でした（笑）　でも、みんな終わったところで、うな重が出たんです！あれはおいしかった！！次にやる子には、祭のあいだはつらいけど、あとでおいしいうな重があるからがんばれって言いたいです。それくらいおいしかったです！」（毬）

7月中旬

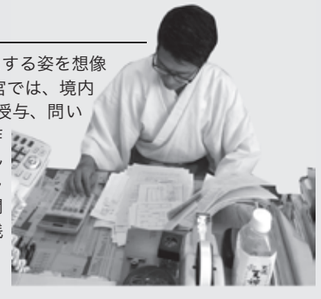
伏見三十石船 献酒式

江戸時代、天神祭が近づくと、伏見から淀川を下る三十石船で銘酒が奉納されていた。船で下れなくなった現在は、淀川三十石船舟唄大塚保存会・桃山温泉月見館・月桂冠によって、天神橋北詰からみこしに載せて天満宮に献酒し、奉告式をしている。舟唄を唄いながらの行列は、古調を耳にする数少ない機会である。（ミ）

神職豆知識

神職は会社員？

神職というと、祭祀やご祈祷をする姿を想像してしまいますが、大阪天満宮では、境内の清掃、お守りやおみくじの授与、問い合わせ対応、経理などの事務作業も神職が担っていて、ほとんど会社員と同じようなことをしているそうです。ちなみに時間内に作業が終わらなかったら残業もあるらしいですよ（笑）
（T）



近江葦奉納式

天神祭では、天満宮の表大門や鉾流神事に用いる茅の輪の材料である青葦を、琵琶湖から運んでくる。葦には水を浄化する作用があり、罪や穢れを取り除くという信仰から、茅の輪くぐりの神事が生まれた。琵琶湖の水が 24 時間で大川に到達することから、近江八幡の葦が選定された。近江八幡での水郷めぐりの際には、このことが紹介される。（ミ）

7月7日

神職奮闘 note

日々の仕事＋祭の準備なので超大変！

天神祭の神事の準備は、すべて神職がおこないます。
その内容は、警察や講社連合、そのほか関係各所との渉外、協賛金のお願いにまわるばかりでなく、テントを立てたり提灯を設営する大工仕事まで、多種多様です。
特に渉外関係。昨年よかったものが今年はダメなど、苦労することもあるとか。伝統の天神祭といえども、毎年少しずつ変わる部分もあるので、「今年もよろしくお願いします。昨年と同様で」とはいかないのです。
祭直前になると、当然ながら、準備しなければならないことがたくさん出てきます。しかし、準備だけに時間を割けるわけではないのです！
毎朝の祭儀や境内の清掃などの日常業務は、普段通りにおこなわれます。決して、おろそかにはできません。参拝者へのご祈祷や、結婚式の依頼などにも出向かなければなりません。それらをこなしたうえでの祭の準備なので、準備作業はどうしても夜間になるようです。最後は徹夜、また徹夜です！（な）

近江葦刈り

天神祭にあわせて天満宮の表大門に設置される巨大茅の輪と星愛七夕まつりに登場する７つの茅の輪は、近江八幡の和船観光協同組合より奉納される葦からつくられている。近江八幡までこの葦を刈り取りに行くのも、じつは神職の仕事。炎天下のなかで葦を刈る姿はとても神職に見えないが、それこそが、天神祭の準備において神職があらゆる作業に従事していることを物語っている。（ル）

茅の輪づくり

近江八幡で刈ってきた葦を使い、７つの茅の輪をつくる。竹でつくった 輪を芯にし、刈り取られた葦を巻きつけるようにしてつくっていく。直径が 1.8 メートルほどもあり、もちろん、ひとりでつくることは不可能。数人の神職が手分けしてつくる。茅の輪くぐりは夏の祓いの行事であり、天満宮では、７月７日の星愛七夕まつりに登場する。７つの茅の輪をくぐることで、「諸願成就」「学徳向上」「心身健康」「家内安全」「商売繁昌」「厄除」「恋愛成就」を願う。ここから、いよいよ天神祭本番が目前に迫ってくるのである。（ル）

天神祭トリビア　大阪天満宮氏子、地元重鎮曰く、「天神祭には白蒸し。力が出るし腹持ちもええ、昔はこれだけで夜まで過ごしたんや」。竹の皮に包んで蒸したもち米に梅干しが入った「白蒸し」を、今でも祭当日の携帯食として神職が渡御に持っていく。天神祭当日には、境内で販売している。

北新地巡行

戦前の陸渡御コースは、北新地まで延びて大変なにぎわいを見せていたが、戦後、御堂筋などの道路整備と交通量増加によって途絶えた。もちろん、戦前の姿に戻したい。従前の陸渡御に戻す足がかりに加え、北新地堂島地域のにぎわいを取り戻すべく、鳳講、天神講獅子により復活☆(ミ)

OBP 前夜祭

昭和 61 年（1986 年）より、7 月 23 日に、OBP（大阪ビジネスパーク）のツイン 21MID タワーにて、神職、催太鼓、地車講、天神講獅子、菅公会によって、前夜祭がおこなわれている。天神祭のダイジェストを涼しい場所で見ることができる、うれしい催し。(ミ)

ギャルみこし宮入

7 月 23 日午後、御羽車講が国道 1 号線より北の氏地巡行をおこなう。ギャルみこしは御羽車講に随行して夫婦橋を出発し、商店街を北上、天六奉安所で神事を斎行する。その後、南下して、午後 4 時頃に天満宮に宮入りする。JR 天満駅前通過時に、カメラを構えたものすごい数の見物客でごった返すのは、もはやこの時期の風物詩。(ミ)

御羽車巡行祭

7 月 23 日正午に、本殿にて御神霊を御羽車に移御し、その後、天神橋筋商店街を巡行する。陸渡御の前に神様が北へ渡られる巡行。天神祭の無事と商店街の商売繁盛を願い、「駐輦祭」がおこなわれる。昭和 24 年（1949 年）、滋賀県の日吉神社から御羽車の寄進を受けたことをきっかけに、天神橋筋 2～6 丁目商店街と振興町会にて講が結成され、60 周年を過ぎた現在も、そのときの御羽車を曳いている。菅公の私用車の位置付け。また、「ギャルみこし」は御羽車の随員というかたちで、宮入りする。(ル)

天神講獅子 練習

ここ天満には、今の時代に消えかかっているものを次世代へ伝える風習が、残っている。祭の儀礼や踊りを教える人は、「自分たちもこうして教えられてきた、だから次の世代になる子どもたちに伝えるのが自分たちの役目」と言う。脈々と受け継がれる伝統。天満はそんなまちだ。
天神祭 10 日前の 7 月 15 日から、天満宮境内では、祭の華である天神講獅子の傘踊り、四つ竹、獅子舞の練習がはじまる。囃子方の練習は、それより先の 6 月から、毎週末に中学生から大人までが集まっておこなう。この期間、大人から子どもまで一所懸命になって、ひとつのことに打ち込む。これこそ、祭の力！（ミ）

各講 当屋飾り付け

当屋とは、渡御に奉仕する道具や神輿や捧げものを飾るため、境内に設けられた仮設の小屋のこと。設置は神職がおこない、太鼓中が一番に当屋を開いて始動する。当屋の飾り付けのなかでは、天神様ゆかりの福牛が一番の人気者。(ミ)

太鼓中 からうす練習

毎年 7 月 11 日あたりから、天満宮では太鼓の音が響く。6 人ひと組 ×6 組の総勢 36 名の願人が、文化財に指定された打ちかたを練習する。催太鼓の打ちかたは 10 種類のパターンに整理され、巡行のシーンごとに使い分けられている。そのなかで最も激しく見応えのある打ちかたが「からうす」！　太鼓の下に丸太を敷き、台をシーソーのように上下させながら打つ太鼓中独特の打法である。練習ではシーソーのように動かすことはないので、これを見ると、本番への期待がいやが上にも高まる。(ミ)

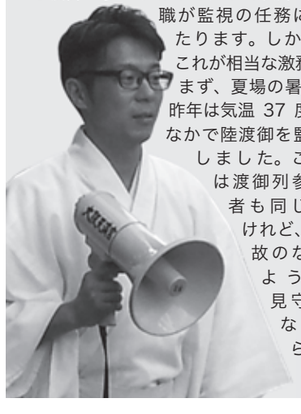
7月23日

式庖丁奉納

庖丁儀式とは、技術経験の高い日本料理の調理師が、烏帽子、直垂の装束をまとい、庖丁と真魚箸（まなばし）のみを用いて、鯉、鯛、鰹などの素材に一切手を触れることなくさばいていく作法を披露するもので、神事などに奉納するものである。
庖丁儀式のはじまりは、平安時代にまでさかのぼる。四條中納言 藤原山蔭卿が光孝天皇の勅命によって料理作法の式を定めたことに由来する。
以降、さまざまな流派に分派し、現在も宗家である四條司家を中心に多くの流派がある。
天神祭では、7 月 23 日に四條流宗家の四條司家が奉仕し、24 日には山蔭流の総持寺山蔭流 京奉会によって奉納されている。(ミ)

神職奮闘 note

渡御での「奉行」は一瞬も気が抜けず…。①



天神祭最終日の陸渡御・船渡御は、神職にとって最大のお仕事。
主にスケジュール通りに行列が進行しているかどうかと、安全面に最大限目を光らせながら監視します。このために「奉行」と書かれたタスキを掛けて、担当ごとに配置を決めて当日の渡御列の進行に当たります。
約 20 名の神職のうち、宮司と権宮司は渡御に参加するので、それ以外の神職が監視の任務にあたります。しかし、これが相当な激務。まず、夏場の暑さ。昨年は気温 37 度のなかで陸渡御を監視しました。これは渡御列参加者も同じだけれど、事故のないように見守りながらなので、一瞬の油断も許されません。
また、途中に信号や接待があるなどして、渡御列はたびたび止まります。余裕を見越してスケジュールを組んでいても、暑さで休憩時間が増えることも多く、急がせる場合も。ハンドスピーカーを片手に、渡御列の進行を早めたり遅らせたり…。ただ、踊りもあれば、小さい子どもも列に加わっているし、牛・馬などの生きものも渡御列に加わっているので、コントロールするのは、まったくもって容易ではありません。できない場合も多い。奉行がやきもきするのは、そんなときです。

そのなかでも細心の注意を払うのは、渡御列が陸から船へ移る天神浜。
天神浜は観客も多く、ひしめき合い、道路から河川敷に下りる道は狭い急坂です。そんななか、鳳神輿と玉神輿の 2 基の巨大な神輿を無事に通過させなければなりません。事故が起これば大惨事を招くような場所。神輿が通過するときこそ、緊張は一気にピークに達します。(な)

しじみの藤棚

江戸時代、大阪町人のあいだでは、社寺の祭礼などのにぎわいのための人形や動物、置物、いわゆる「造り物（つくりもん）」をつくることがはやった。発祥の地であるはずの大阪では絶滅の危機にあるが、天神祭では、つくりもんや御迎え人形がしっかりと生き残っている。
毎年披露されている「しじみの藤棚」は、シジミ貝の裏側の紫色を重ねて藤の花に見立てたもので、当時のマニュアル本を参考に、淀川の漁師の協力を得て、天満宮御伽衆によって製作されている。淀川で採れたシジミ貝 1 万個でつくる藤棚のつくりもんは、遠目には本物にしか見えない出来栄え！（ミ）

御迎え人形とつくりもん

天神祭に欠かせないのが、御迎え人形。船渡御を迎えるため、まちごとで競ってこしらえ、最盛期の元禄期には 50 体を超えるも、現在は 16 体を残すのみ。当時の芝居の登場人物をモデルにしたということは、今ならアナやエルサ？　2 メートル超えの大きな人形もあったそう。天神祭の前にはあちこちで展示され、スタンプラリーもあります。
「つくりもん」とは、ありふれた日常品を、なにかに見立ててつくったもの。江戸時代、奇抜なつくりもんを奉納するのがはやり、アイデアと技術を競ったのでした。
「しじみの藤棚」が見応えじゅうぶん。(ル)

こもづくり

天神祭直前、7 月に入ったあたり、人知れず、境内の一室で黙々と「こも」を編んでいる神職がいる。こもは、殿上の大床や神事の際の神前への奉納物の敷物として用いられることが多く、天神祭では、鉾流神事の際に、穢れを祓う「かたしろ」を巻くためのものとしてつくられる。
マコモや藁で編んだものが一般的だが、天神祭では、茅の輪に使う葦で編む。特殊な道具を使い、編み上げていくその様子をつぶさに見ていると、縦糸と横糸を組み合わせていることから、編みではなく、織りの技法でつくられていることがわかる。また、その道具も、古くから使われているものだが、時代時代の使い手によって少しずつ改良が加えられており、無形文化財に指定されてもいいのでは？と思えるほど。祭の伝統を継ぐということには、こういうものも含まれてのことだと、わかるシーンである。(ル)

天神祭トリビア　難波長柄豊碕宮の守護神である大将軍社の創祀は、天暦３年（949 年）の大阪天満宮鎮座より 250 年さかのぼる。そうすると、大将軍社の「鍵取」を務めていた大阪天満宮宮司「寺井家」は 1300 年を超える歴史があるということになり、天皇家・五摂家と並ぶ系譜ということに。

どんどこ船宮入

中之島周辺から道頓堀川を縦横無尽に漕ぎまわり、祭ムードを盛り上げるどんどこ船の宮入は、神鉾返還をおこなう火と水の祭典・天神祭の「水」を代表する神事である。鉾流神事で神童が流した神鉾は御鳥船によって回収され、どんどこ船が本殿に返納する。
平成 13 年（2001 年）より、鉾返還神事のために７月 24 日の午後４時頃、どんどこ船が陸に上がるようになった。川で見ると小さく見えるどんどこ船を間近で見るとき、想像以上の大きさに多くの見物客が圧倒される。船の上に立てられた櫓や櫂を持ち、宮入りする小若の姿は、子どもながら凛々しく、鉾返還神事を終えたあとの船の方向変換、鉦や太鼓を打ち鳴らして境内を練る姿は圧巻のひとこと。（ミ）

太鼓中・天神講獅子 宮入

宵宮の夕方、氏地巡行を終えた催太鼓が宮入。シーソーのように前後左右に揺する「からうす」では、向かい合った真んなかの２人だけが太鼓を打ち、両脇の願人は中の願人が落ちないように支える。その雄姿、息を合わせて担ぎ上げる姿が見どころ。また、天神講獅子の傘踊り、四つ竹、獅子舞、総勢 600 人余りが表参道を埋め尽くして踊る姿は整然として美しく、シンフォニーのよう！（ミ）

地域祭
みこし宮入

天神祭では、催太鼓の願人と同じ投げ頭巾をつけた子ども催太鼓や各地域のみこしや獅子舞が、宮入りする。本宮までの３日間、天神橋２～６丁目の商店街のみこしや子ども太鼓、獅子舞が終日商店街を行き交い、一体感を醸し出す。（ミ）

一番太鼓

７月 24 日午前４時、早暁の静寂を破って、催太鼓の一番太鼓と地車囃子の一番鉦が打ち鳴らされる。天神祭の幕が上がった！（ミ）

太鼓中・天神講獅子 氏地巡行

催太鼓は、翌日の本宮には氏子がみんな揃って御神霊をお迎えできるよう、触れ太鼓の役目も果たす。巡行途中、旧天満市場前にて、本宮で使用する「本太鼓」に換える「太鼓換の儀」をおこなう。
天神講獅子は、７月 24 日午後３時 30 分、天神橋筋商店街を６丁目から１丁目に向けて巡行する。子どもから大人まで狭い商店街を隊列を組んで、「そーれ」の掛け声とともに右へ左へ傘をかざして揃って踊る「傘踊り」と、リズムよく竹を打ち鳴らす「四つ竹」の姿は、天神祭の華！（ミ）

宵宮 7月24日

千代崎行宮 宵宮祭

天神祭では、大川に鉾を流してたどり着いた場所に斎場をつくり、そこで神事をおこなった。その後、川筋に家が建ち並びはじめたため、寛永年間に京町堀に行宮（御旅所）を設けた。行宮は戎島から松島へと移ったものの、船渡御の目的地は、あくまで行宮。地盤沈下により、船渡御が現在のように大川を往復するようになったのは、昭和 25 年（1950 年）からである。
現在では、７月 24 日午前中に西区の千代崎行宮へ寺井宮司が赴き、地元子どもみこしも加わって行宮宵宮祭がおこなわれており、当時の名残を見ることができる。また、毎月 25 日には月次祭もおこなわれている。（ミ）

宵宮祭

７月 24 日午前８時、大祭の準備を終え、翌日の大祭をおこなうことを神前に奉告し、鉾流によって御神慮が示されるようお願いする。御神慮とは、神の思し召しのこと。（ミ）

鉾流神事

天神祭は天暦５年（951 年）、社頭の浜から神鉾を流し、漂着の地を斎場として禊をおこなった鉾流神事を起源に持つ。御旅所が常設されてからは鉾を流す必要がなくなり、鉾流神事は途絶えたが、昭和５年（1930 年）に復活し、現在に至る。
７月 24 日午前８時 30 分、宵宮祭に引き続き、天満宮より神鉾講を中心に渡御列が出発。午前９時から鉾流橋北詰（旧若松浜斎場）にて、夏越大祓神事が斎行される。神職と神童が乗った斎船が堂島川のなかほどに漕ぎ出され、白木の神鉾と人々の罪穢れを託した人形が流され、御神慮を願う。神童は鉾流神事のほか、御神霊を移御する瑞枝を持ち、瑞枝の童子として陸渡御に加わり、船渡御では御神霊を奉戴する「御鳳輦船」に乗船し、祭のキーパーソンとして重要な役目を果たす。（ミ）

船御渡

陸渡御を終えた行列が船に乗り込み、供の船を従えて大川を行くのが船渡御。篝火が水面を照らすなか、天神浜を出航する奉安船・供奉船の約 50 隻は上流へとさかのぼる。神々しい雰囲気に包まれた御神霊を奉戴している御鳳輦奉安船では、にぎやかな船団のなかで唯一、雅楽が奏せられる。また、献茶船より貴人点というお点前で御神霊にお茶が献上され、荘厳な船上神事が斎行される。御鳳輦奉安船とすれ違うときには、鳴りものを止めて静かにお見送りするのが習わし。御神霊の巡行を奉祝する奉納花火とともに、停泊船では神楽や伝統芸能が奉納される。上流から来る奉拝船との大阪締めで、祭のムードを盛り上げている。（ミ）

お接待

暑いなか、陸渡御の行列へお茶などをサービスすることだけが「お接待」だと思われがちですが、本来は、氏子たちから神様へ「よく今年も来てくださいました。おかげで毎日健やかに暮らせています」という感謝の気持ちの表れです。（や）

ダストバスターズ

付近一帯で大量に出るゴミ。天神祭美化委員会の清掃ボランティアの方々が、ゴミ箱の組み立てから設置、ゴミの分別回収まで、天神祭を陰で支えています。暑いなか、神職も一緒に作業します。（や）

陸渡御

神霊移御祭で御神霊が御鳳輦に奉戴されると、陸渡御がはじまる。催太鼓は祭の触れ太鼓、陸渡御の先頭は道先案内人を務める猿田彦。御神霊がおいでになることを知らせる第一陣は、地車や獅子舞、傘踊りの掛け声や鳴りものでにぎやかな渡御列。白装束の奉行に続く第二陣は、御神霊を奉戴する御鳳輦が斎主とともに粛々と歩く「静」の渡御列。第三陣は、勇壮な鳳神輿と玉神輿の「動」の渡御列。その数、総勢およそ3000人！　戦前には、当時人気者だった大阪相撲の力士や八処女に扮した大阪四花街の女性が参加し、平安絵巻に華を添えていた。陸渡御を見るなら、天神橋筋大鳥居前が絶好スポット！（ミ）

鳳講子どもみこし

7月 25 日、本宮の日の午前中、鳳講に奉仕する菅南８町会に住む子どもたちが、鳳講子どもみこしを曳いて氏地を歩く。天満宮境内を出発して菅南幼稚園までを幼児たちが曳き、菅南幼稚園から西天満小学校までを小学生たちが曳く。こうして地域の子どもたちは、小さいときから天神祭へと引き込まれていく。（ミ）

7月25日 本宮

神職豆知識

密かにオシャレを楽しむ神職さん

普段、神職は白衣袴で社務をしています。袴の色は身分が高いほうから、紋入りの白袴→紋入りの紫袴→紫袴→浅葱袴と決まっているため、勝手に好きな色の袴を着用することはできません。そういうことから神職はオシャレができないと思いきや（そもそもオシャレとか言ってはいけない立場かもしれませんが…）、じつは同じ色でも仕入先によって色合いが若干異なるため、仕入先を変えることで密かにオシャレを楽しむ神職がいるそうです。大阪天満宮の神職のなかには、わざわざ東京まで仕入れに行く人もいるらしいですよ（笑）

一方、袴の素材には決まりがありません。天神祭など、ここ一番のときは正絹素材の袴を着用しますが、普段は洗濯できて清潔感のあるテトロン素材の袴を着用したり、暑い日は涼しげな紗素材の袴を着用したりするなど、素材をいろいろと試されているそうです。（T）

神霊移御祭

御神霊が梅の瑞枝にお遷りになり、御鳳輦に奉戴する儀式。この神霊移御祭がはじまると、境内では、催太鼓、地車、獅子舞など、すべての鳴りものが鳴り止み、御神霊が御鳳輦にお遷りになるとき、御神霊が外部から見えないように白い布で囲む。この白い布を絹垣という。神職に準じる御鳳輦講講員は「おー」と唱えながら、宮司が奉じる御神霊の先払いとして奉仕する。御神霊が御鳳輦にお遷りになると、催太鼓が打たれ、地車囃子が奏され、陸渡御へと移る。（ミ）

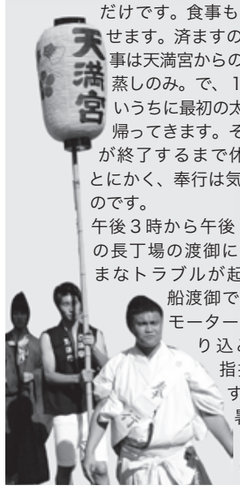
夏大祭本宮祭

7月 25 日午後１時 30 分、拝殿の太鼓が鳴ると境内のお囃子や鳴りものは止み、夏大祭本宮祭の祭儀がはじまる。国家安泰、氏地の平安と繁栄が祈願され、関係者の拝礼、神饌を撤して、本宮祭は終了する。（ミ）

神職奮闘note

渡御での「奉行」は一瞬も気が抜けず…。②

さて、陸渡御がすべて終了し、船渡御の最後の船を見送ると、奉行もひと息。渡御の最中に休憩できる時間は、ここだけです。食事もここで済ませます。済ますのですが、食事は天満宮からの携帯食の白蒸しのみ。で、１時間もしないうちに最初の太鼓中の船が帰ってきます。それ以降、祭が終了するまで休憩がない。とにかく、奉行は気が抜けないのです。



午後３時から午後 11 時までの長丁場の渡御には、さまざまなトラブルが起こります。船渡御では、奉行がモーターボートに乗り込み、各船の指揮を執ります。昨年は暑かったためか、熱中症にかかる参加者がいました。そのための救護手配をするのも、奉行の役目。必要なものが足りなくなれば、天満宮から天神浜まで全速力で走って荷物を届ける、通称「浜ダッシュ」をすることも。一番暑い日に駆け巡る体力勝負の役目は、若い神職の担当です。

すべての講が宮入りして天神祭は終了しますが、残務があるため、神職は７月 25 日夜も泊まり込み、翌朝にようやく終了します。

これほどの激務ですから、さぞかし体調管理に気をつかっているのかと思いきや、特になにもしていない、と。準備期間を含めても、体調を崩すことはないそうです。期間中、気が張っているからでしょうか。激務のなかで任務にあたる奉行の神職たち。今年の天神祭も奉行が活躍します。目立たないですが、重要な役割を担っています。そういうことにも思いを馳せながら見物すると、華やかなだけではない、味わい深い天神祭の景色が見えてくるかもしれませんね。(な)

奉納花火

高さは帝国ホテルとほぼ同じくらい。花火が高く上がらないからといって、文句を言うなかれ。御神霊に奉納する奉納花火ゆえ、見物人は傍観する立場なのだ。むしろ、神様と一緒に見せていただくことに感謝を！　船上で見ていると真上に上がる花火は、ドーンと響く音とともに、臨場感たっぷりである。（ミ）

宮入

船渡御を終え、大川から天満宮へと向かう宮入は、陸渡御と同じく催太鼓からはじまる。ひときわ盛大に打ち鳴らす催太鼓は、名残を惜しむように何度もかからうすをおこなう。地車囃子に合わせて龍踊りも華を添え、獅子舞も、これが最後と力のかぎりの舞を披露する。還御祭後の２基の神輿の練り歩きは、祭の最後にふさわしい熱気と興奮に包まれ、大阪締めが何度も繰り返される。しんがりの玉神輿が当屋に納まると、権宮司が本殿内陣の御扉を閉じる。この瞬間、渡御式が完了する。（ミ）

7月26日

庫納め

祭が終わってまだ数時間。早朝から、御神霊が巡行する道に張られた御幣を外す地域の人たちの姿がある。境内でも当屋を片付ける作業がはじまり、来年の出番を待つ道具や神輿が各講の庫に納められる。まちも人も、ハレからケに戻る瞬間である。（ミ）

還御祭

氏地巡行を終えた御神霊を御鳳輦から本殿へお還しする神事。本殿の灯りをすべて消し、厳かに斎行される。２日間鳴り響いていた地車囃子も打つ手を止めて見守り、還御祭が終わるまで宮入を中断する。御神霊に神饌として白粥が献進され、天神祭はフィナーレを迎える。今は丸物神饌が一般的であるが、天満宮では白粥のような特殊神饌がお供えされている。（ミ）

※神輿＝神霊が乗るもの　みこし（御輿）＝人、モノが乗るもの

彼女とキタのラブストーリー ―第五回―

天満宮 権禰宜　**糸数 智子** さん

一般家庭に生まれた少女が、どのようにして神職の世界に入り、どんな想いでこの仕事を続けておられるのか。大阪天満宮の女性神職、糸数智子さんにお話をうかがいました。

一般家庭の少女が、神社の世界に

神社にかかわる家系ではなく、一般家庭に生まれた糸数さん。幼い頃からお祭好きで、地元のお祭に出かけたときに、お神楽を舞う同級生を見て「どうしてこの人たちはお神楽ができるんやろう？　ここには何があるんやろう？」と、うらやましく思う気持ちと、お神楽や神社の世界への関心が膨らんでいたそうです。

その後、進学した帝国女子高等学校で、糸数さんと大阪天満宮の運命の出会いが待っていました。

高校時代は、お姉さんのあとを追って婦人警官を目指していた糸数さんですが、オイルショックにともなう公務員人気が重なったこともあり、残念ながらその夢は叶いませんでした。

進路をどうしようかと悩んでいたとき、古事記に書かれているような社会が今でも神社には残っているということ、また先輩のなかには大阪天満宮で奉仕している方がいるということを知り、「先生、私もなりたい！」と思わず声をあげていたと言います。

それを聞きつけた英語の先生から大阪天満宮へ問い合わせてもらったところ、すでにその年の採用者が決まっていたものの、追加の採用を検討してもいいとのこと。そして、すぐさま面接へ。

「生意気盛りの私を引き受けていただき、晴れて巫女になりました」と、まるで昨日の出来事のようにうれしそうにお話される糸数さん。18歳の頃の「なりたい！」という真っすぐな気持ちを持ち続けていらっしゃるように感じます。

巫女となり、憧れだったお神楽の稽古もはじまります。「お神楽の先生に神明奉仕の精神を叩き込んでいただきました」と、糸数さん。先生の舞の美しさと、神道の精神性に惹かれていき、とても充実した楽しい日々だったと言います。

巫女から神職へ

しかし、楽しい日々も永遠ではありません。25歳くらいになると巫女としてのお勤めを終えなくてはならず、大好きなお神楽もこのままでは続けられなくなる。先代の宮司さんからは、辞めずに秘書として残ったらいいと言われたそうですが、

「外の世界を見て勉強してきますと言って、出させてもらったんです」

と、当時の葛藤が見え隠れします。

外の世界として選んだのは、なんとスイミングスクールのインストラクター。巫女さんからは想像もつかない職業ですが、「水泳も好きでしたから。たまたま募集があったので」と、そのときそのときの気持ちに素直に動かれる、真っすぐな糸数さんらしいお答えです。

1年が経ち、一日中プールに入って子どもたちを指導することに体力的な不安を感じていた頃、「勉強どうなった？」という宮司さんのお電話がきっかけで、大阪天満宮に秘書として戻られます。

戻られてからは、大好きだったお神楽も再開し、今では地域の子どもたちや高校の部活動の指導にも携わっておられます。また、秘書としてお勤めされながら、神職の勉強をされ、3年後にはあらためて神職として迎え入れられます。

女性神職ならではの仕事があります

糸数さんが神職になられた頃は女性神職も少なく、神職として認められない歯がゆさや葛藤もあったと言いますが、「女性にしかできない仕事、女性ならではの仕事があります。ご祈祷などの神職の仕事は男性もできますけど、私たちはお茶くみから食事づくりまで細やかな配慮ができるので、いろいろな仕事の可能性があると思っています」という言葉からは、女性神職ならではの仕事への誇りを感じます。

そんな糸数さんのお仕事は、じつに多様です。天神祭では、着付け、神童の世話役、渡御の奉行役、祭事にかかわる方々の食事づくりもされています。「１００食以上つくるのは慣れたもんですよ。そのかわり少人数分をつくるのが難しいんです」と、笑いながらお話されますが、一日中、お祭の裏方として走りまわりながら、大人数の食事の準備までされているとは、驚きです。

神職の仕事にプラスして、裏方の仕事まで。その内容をお聞きすると大変に違いありませんが、糸数さんの言葉からは、大変さよりも楽しさが伝わってきます。最後にその理由をお聞きすると、

「大阪天満宮で、人として、神職として、育てていただいた。その恩返しをいかにしていったらいいのかを考えています。一般家庭に生まれた私が、神社奉仕できることに感謝しています。毎日、すごい！すごい！が重なって、楽しいんです」と、糸数さん。

感謝の気持ちに満ちた仕事への真摯な姿勢と、長年勤められた今でも神職という仕事への新鮮な感覚を持ち、神社の世界に生きる歓びが伝わってくる言葉でした。

一般家庭に生まれながら、巫女、そして神職となられた糸数さん。清々しい笑顔と、真っすぐな瞳の魅力は、経験を重ねられた落ち着きよりも、毎日すごい！の連続だという生まれたてのようなフレッシュな心から来るのだと思います。

神様もそんな彼女の魅力に魅せられ、大阪天満宮にお導きになられたのではないかと思わずにはいられません。（終）

聞き手・書き手／依藤智子
撮影／浅香保ルイス龍太

現代に残る、かつての名残

まちの記憶

天神祭こぼれ話〜むかしの天神祭、花街のこと

祭屋 梅の助　井上 彰

大正10年（1921年）の陸渡御を描いた絵巻「夏祭渡御列図」には大阪花街の芸妓たちが「八処女」に扮して渡御列に奉仕する様子が描かれている。天満宮を出門するのは、南地五花街、堀江、新町、北の新地の順。
写真は渡御列に出発する前に境内で撮影された南地五花街・堀江・新町・北の新地のそれぞれの八処女の記念写真（右上から時計まわり）。撮影年は不明だが大正時代から昭和初期にかけて撮られたと思われる。

天神祭と、天満人のＤＮＡ

私はフリーペーパーの『あるっく』と情報誌『天満人』の取材を通して多くの方にお話をうかがいましたが、天満で生まれ育った方は、ほかの地域の方々に比べ〝地元愛〟が強いように感じました。特に転居して天満を離れた方ほど、それが強い。なぜだろう？　と考えましたが、それは美しい大川の四季の情景とともに、千年以上も地元の祭礼として受け継がれてきた天神祭への誇りが、ひとりひとりの心に深く刻まれているから、ではないのでしょうか。

昭和の名曲『神田川』の作詞家、喜多條忠さんも天満のお生まれですが、小さい頃は体が弱くて人混みのなかに出ることができなかったそうです。だから「小学校1年、2年の頃の天神祭の思い出といえば〝下駄の音〟でした」とおっしゃいます。

喜多條さんのご実家は天神橋筋1丁目商店街の昆布問屋で、天神祭になると店先にも縁日が並び、宵宮（よみや）は深夜の3時、4時頃まで、カラコロカラコロ下駄の音が響いていました。

「耳をすませば催太鼓や地車囃子、傘踊りの音が遠くから聞こえてきました。にぎやかな船渡御も終わり、厳粛な宮入が済むと、祭の後の寂しさが込み上げて『天神祭が行ってしまう』と泣きました……」

名曲『神田川』を生んだ詩情の原点は、幼心に刻まれた〝天神祭の下駄の音〟だったのかも知れません。

天神祭の起源は古く、大阪天満宮が鎮座した2年後の天暦5年（951年）にさかのぼります。千年以上の歴史ある天神祭は、厳粛な神事としての古式の伝統を由緒正しく守りながらも、その時代時代の社会情勢にダイナミックに反応しながら、新しい習俗を柔軟に取り入れて今日に受け継がれてきました。

近々では、昭和56年（1981年）に天神橋筋商店街の方々からお申し出があり、7月23日に神様が氏地の北側をお渡りになる御羽車（おはぐるま）の巡行が実現し、その随員として「ギャルみこし」が誕生しました。翌57年（1982年）からは宮入が実現しています。

かつての天神祭には北の新地の芸妓が『八処女』に

戦後間もない頃には、天神祭に北の新地の芸妓（げいこ）さんたちが『八処女（やおとめ）』に扮して、陸渡御のお供をしたことがありました。古くは大正10年（1921年）の陸渡御の様子を描いた絵巻『夏祭渡御列図』にも、渡御列に奉仕する大阪花街の芸妓たちが描かれています。

八処女とは神楽などを奏でて神社に奉仕する少女のことで、八少女（やおとめ）とも表します。

雑誌『天満人』の天神祭特集号では、八処女で天神祭にご奉仕されたご経験のある西川梅十三（うめとみ）さんにお話をうかがうことができました。梅十三さんは京都のお生まれですが、大阪・北の新地で花柳界にデビューされました。

「わたしは戦後初めて大阪に舞妓が誕生したときの第1期でした。舞妓でデビューしたんですが、2年ほどで芸妓になりました」

花柳界では舞妓から芸妓になることを「襟替（えりかえ）」と言うそうです。芸妓が年季を積んで一人前になるときに襦袢の襟を赤色からほかの色に、舞妓の場合は金入りから無地に替える風習があり、それが語源になっているとか。

今では一般的に「北新地」といわれますが、「北の新地」が正式な呼び方で、かつての北の新地は今とはずいぶん様子が違っていました。大正7年（1918年）の統計によれば、当時の北の新地には芸妓の置屋が11軒、貸席が153軒もあり、825人もの芸妓さんがいたそうです。

昭和35年（1960年）に出された北の新地の地図を見てもまだまだお茶屋の数も多くて、鶴屋、なだ万、吉兆、花外楼、堺卯（さかう）などの老舗の料亭も栄えており、梅十三さんによれば芸妓も200人ほどおられたそうです。

梅十三さんが八処女で天神祭の陸渡御のお供をされたときは、北の新地から8人、堀江から8人の芸妓が参加。ご奉仕するのは陸渡御だけで、コースは大阪天満宮の大門を出て天神橋のたもとまでです。

天神祭は神事の「静」と、祭事の「動」が融合した日本最大の火と水の祭典ですが、「わたしらが八処女で出てた頃の天神祭は、人出はあっても今ほど派手やかなことはおまへんでした。船渡御ものんびりしていて、情緒がおました」と、梅十三さんはおっしゃいます。

「昔は地車囃子も心地がよぉて、どこからともなく義太夫なんかも流れてきました。神様がお乗りになった御鳳輦がお通りになるときは、笙（しょう）・篳篥（ひちりき）の音色が静かに聞こえ、なんとも言えん、ええ雰囲気でした。今はまわりがにぎやかでっさかい、そんな情緒がなかなかありません」

天神祭は北の新地も閑散としていました。

「昔は天神祭の日は証券取引所かて休みで、北区の会社はほとんどお休みか半ドンでしたさかい、お客さんが来やはりません。ご贔屓さんも天神祭はお祭見物に行かはりまっさかいねぇ」

今の天神祭はテレビで中継もされるし、どうしても船渡御の方が有名ですが、かつては陸渡御も道中が長くてにぎやかでした。

「昔は桜橋に商工会議所がありましたさかい、陸渡御は老松町を通って、北の新地の本通を四ツ橋筋まで行ったんです。それからまた川沿いを戻って天神橋のたもとまで帰り、船に乗り込みました」

現在の陸渡御でも、総奉行、前行、前衛のお役の方々は馬に乗って神様のお供をされますが、昔の陸渡御では、宮司さんも馬にお乗りになってお渡りをされました。

「北の新地をお渡りが通ると、お茶屋の2階から、馬に乗られた宮司さんにみんなで手を振りました。声をそろえて『宮司さぁ〜ん』言うて（笑）」

「わたしは舞妓になりたてで八処女に選んでいただきました。名誉なことでしたさかい、新（さら）の着物を新調しました。ひとりずつ人力車に乗せてもろたんですが、車夫はおじいちゃんでヨタヨタしたはりました（笑）」

時代の移り変わりで、『八処女』のお供は人力車からやがてオープンカーに変わり、さらに時代が移ってその艶やかな姿も、陸渡御列から消えてしまいました。

西川梅十三さん

昭和28年（1953年）頃の天神祭陸渡御で、人力車に乗って天神橋筋1丁目商店街から天満宮に向かう八処女。後方が梅十三さん。
わずか2時間ほどのお渡りだったが、真夏のきつい西陽にあたり、梅十三さんの着物は色があせてしまったそう。当時の天神橋筋商店街には、まだアーケードがない。

昭和30年代の北の新地と芸妓さん

人力車からオープンカーに変わった頃の北の新地の八処女

【井上 彰】
昭和24年生まれ。キタを舞台にした伝説のフリーペーパー「あるっく」の編集・発行人。「あるっく」は「天満人」に発展し、発売1ヶ月で初版3,000部を完売するも、平成7年に惜しまれつつ休刊。その後イタリア風食堂『祭屋梅の助』を5年間続け、平成27年3月にリセット。生きかたを整理しながら『天満人』の続編発行を計画中。

【祭屋 梅の助】
大阪市北区天神橋1-14-8
tel. 090-3058-8947
夜のみ完全予約の社交場。詳しくはお問い合わせを。